

小牧実繁先生の人と学問

本会名誉会員小牧実繁先生には平成2年2月18日御入院先の京都北郊の石野病院で逝去された。享年91歳であられた。

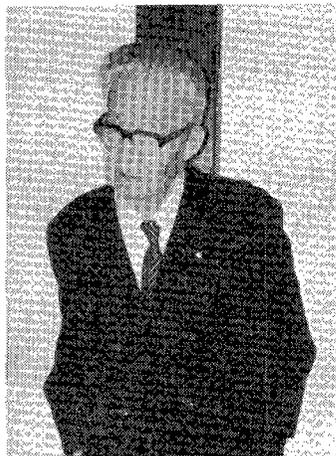
先生は明治31(1898)年10月滋賀県滋賀郡下阪本村(現大津市下阪本町)で酒井神社祠官小牧実時氏の長男として誕生された。御母上も蟬丸神社祠官三上家の出で教神崇祖の純日本の家庭に生育された。いわば純粹培養による純日本人の形成ともいえるべく、先生の純心無垢な御性格は極めて純度の高いものであった。

明治38年先生は阪本村小学校に入学され、同44年卒業に際しては郡優良児童賞を受けられた。そして県立膳所中学に入学され、卒業には同じく優等賞、5ヶ年皆勤賞を受けられた。かくて大正5年第三高等学校一部乙類に入学された。大正8年先生は御父上の御希望をも勘案されて敢て京大文学部を選ばれ、史学科で地理学を専攻される事となった。指導教官は小川琢治・石橋五郎の両教授で、大正11年卒業論文「海岸の研究——河北潟を中心として——」を提出、引続き大学院で研究を続けられた。考古学の浜田耕作、国史学の西田直二郎教授などからも指導を受けられた。殊に浜田教授は国内さらに満州の発掘調査に先生を同伴された。大正12年先生は三高講師を、同15年文学部講師を嘱託され講義題目として先史集落地理を選ばれた。

昭和2年在外研究の旅に上られ米国經由英国までは浜田教授と同行、イギリス滞在後フランスパリのソルボンヌ大学でマルトンヌ、ショレイ教授のもとで研究された。留学中地理学の他、人類学、考古学、民俗学など隣接科学の勉強にも精進された。昭和4年帰路ジブチ港に寄港、アビシニア(エチオピア)に入国され、ハイレ・シラシエ国王に謁された。

帰朝後の初講義はアビシニア地誌でアフリカ唯一の現地人独立国の実状をつぶさに教授され、国王が日本の青年学徒を引見した熱意のほども伺われた。

先生は学位論文「先史地理学研究」を京大文学部に提出され、昭和12年文学博士の学位を受けられた。主査は浜田耕作教授、副査は羽田亨教授(東洋史)、西田直二郎教授であった。なお本論文は昭和11年内外出版で印刷公刊された。内容は、第1部先史地理



学の理論、第二部は先史地理学的研究で実証的地域研究である。

まず第1部は先生の地理学観、歴史地理学、先史地理学の3段階の構成である。地理学はギリシャのゲオグラフィア以来土地を画く事にあったとし学史的にその発達を展望され、リッター、リヒトホーフ、ユンからシュルターに及ばれ「地理学においては景観なる概念によって表はされる土地・地域の様相を、それを構成する諸要素、諸現象間の相互関係、交互作用による相制関係において(即ちその構造と生理を見て)地理学において最も使用せられる手段たる分布的研究を媒介として単に静態的のみならず動的に叙述されねばならない。かくして統一的全体としての土地を描出する地理学は次第に完全の域に達するであろう」とされる。

ついで歴史地理学は地理学の時間の範疇に関する一部面であり、歴史時代における土地・地域(景観)を描出することが歴史地理学の使命であり職能であるとされる。そして現在の景観の背景づけ、基礎づけの為の歴史的方法、後のいわゆる景観変遷史的研究の重要性をも認められた。先生の歴史地理学の理論は京大の後進に受継がれ人文地理研究の主流となって今日に至っている。

先史地理学の対象は先史時代(人類の出現より歴史の黎明に至る)における景観で、これを描出する事が先史地理学の使命であり職能であるとし、その

方法は歴史地理学のそれとほぼ同じであるとした。先生は1928年ケンブリッジにおける国際地理学会議で、先史地理学研究の必要性を世界に初めて提唱された。

先史時代の自然については貝塚の分布や火山灰層と石器時代遺物包含層との関係などからある程度復原が可能であり、人類集落については旧石器時代・新石器時代と時期別に分布図の作製が必要であり、また考古学者の注目する大遺跡のみでなく、先史地理学では小包含層などに広く注意する事が必要であるとされる。

第2部は先史地理学的研究と題され、越後・羽後海岸平野、河内平野、出雲平野における先生の先史地理学的実証研究の成果が収められている。

当時は今日の第四紀学や花粉分析などがまだ未発達であったが、地形や地質と遺跡を主とする先史地理学的研究でほぼ妥当な判断を得られたものであった。

先生は昭和7年、14年と中国へ出張された。やがて昭和15年には紀元2600年祭が行われた。内外の非常事態に対処するために国民の思想統一をめざして天皇を中心とする国家思想が強調された。先生は敬虔な神官の家庭に育たれたので最も自然にその思想を受容鼓吹され、それに基づいて実践的な地理学を構想されて『日本地政学宣言』を公にされた(昭和15年弘文堂刊)。ついで『続日本地政学宣言』(昭和17年白揚社)を出された。両書とも新聞や雑誌などに寄稿された先生の所信を集録されたもので、片言隻語に貴重な創意が伺われるが、時局倉皇の折柄体系化されるに至らなかった事が惜しまれる。

昭和20年12月先生は敗戦の責任を負い、自ら京大教授の職を辞された。自活の資を得るために大学に近い吉田神社の門前に古本屋を始められた。私も九州に帰耕を余儀なくされていたが、ある日僅かの飯米をたずさえ御見舞に伺ったところ、先生は平然と店頭に坐っておられ、かえって激励をいただき意を強くさせられた事が思い出される。

先生は昭和22年教職追放に指定されたが、同26年解除された。翌27年滋賀大教授に任ぜられ学芸学部(後に教育学部と改名)に勤務された。そして昭和34年から衆望を負うて滋賀大学長に任ぜられ同40年退官まで在任された。なお昭和44年には京都学園大学教授に任ぜられ、47年から同大学図書館長を勤められたが、53年に退任された。

先生は戦後の在野時代、その後教職に復帰されてからも地域社会への奉仕を怠られなかった。比叡山文化総合研究会員諸氏の協力により昭和29年『比叡山』を刊行された。同32年滋賀県文化財専門委員を委嘱された。同35年『葛川明王院——葛川谷の歴史と環境——』を刊行された。なお『新大津市史別巻』を38年に完成された。同42年『城南——鳥羽離宮を中心とする——』をまとめられた。同じく34年には日本歴史地理学研究会顧問、35年には琵琶湖水政審議会委員、36年には滋賀県観光事業審議会委員を委嘱された。昭和38年には滋賀県民俗学会を設立して会長に推され54年まで在任、以後名誉会長として没年に及ばれた。これより先、先生は日本人類学会の評議員また特待会員となられていたが、昭和42年名誉会員に推薦された。月刊民俗文化は滋賀県民俗学会の機関誌で、40年までに11篇の論説を寄稿された。なお紀要として『大津市天ヶ瀬ダム水没地区調査報告書』(1965年)、『高島郡今津町・川上祭』(1966年)、『比良山系東麓のショウブヌキについて』(1965年)、『米原町榎ヶ畑の民俗』(1966年)、『愛知川谷の民俗』(1967年)、『江若国境の民俗』(1967年)を刊行された。

昭和43年先生の古稀を祝して盛大な祝宴が催され門下生を主とする古稀記念事業委員会により論文集『人文地理学の諸問題』(大明堂刊)が献呈された。その末尾に先生の年譜と先生自撰の著作目録が付されている。

昭和59年滋賀県は先生の長年にわたる郷土文化への貢献に対し滋賀県文化賞をおくった。その祝賀会の参加者に記念として先生は初期の民俗調査を『近江見聞録——伝承を訪ねて五十年』としてまとめておくれた。

一昨年11月織田武雄兄と一緒に御入院先に参上したところ、先生はなおお元気で大変お喜びいただき、辞去に際してはわざわざ玄関先の門前まで降りて私どもが見えなくなるまで手を振ってお見送りいただいた。先生の御温情に感泣した。

先生が90歳を越える天寿を全うされ、学界に、また地域社会に多くの貢献をなされたについては清子夫人の内助の功に俟つ事大なるものがあつたと拝察する。令息方もそれぞれ所を得られ先生は後顧の憂なく御永眠されたのであつた。今はただ先生の御冥福と御遺族の御安泰と御繁栄を祈る次第である。

(米倉二郎)